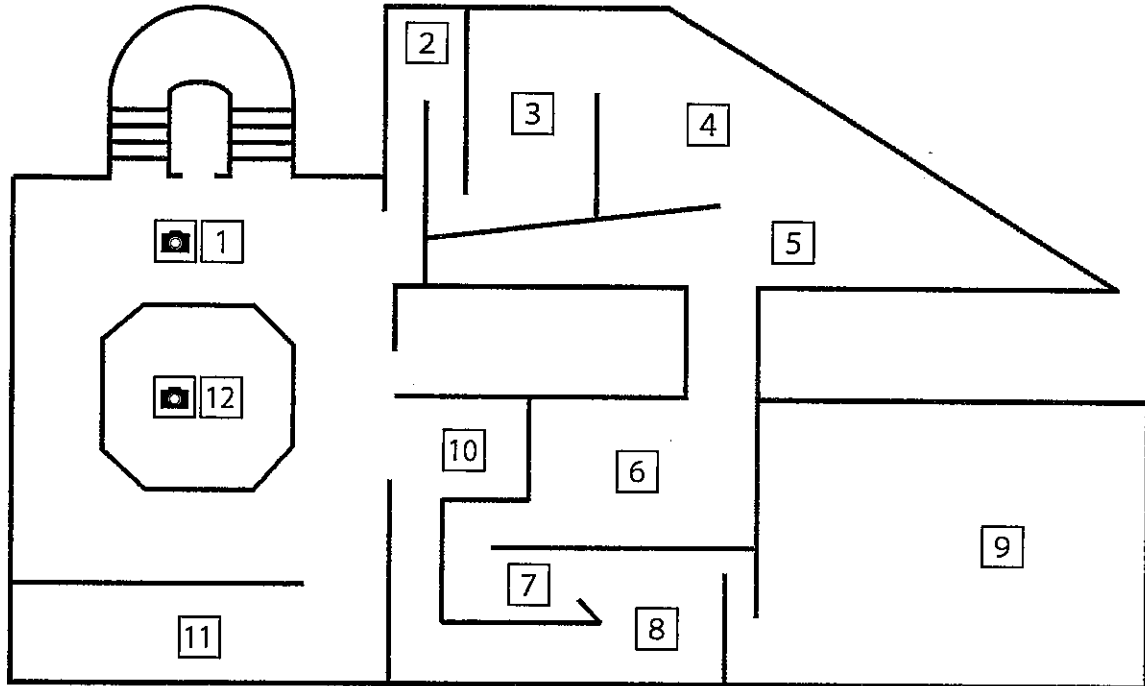



遠藤利克展－聖性の考古学 出品リスト

TOSHIKATSU ENDO: The Archaeology of the Sacred | List of Works

会期：2017年7月15日（土）－8月31日（木）

会場：埼玉県立近代美術館 2F展示室＋BFセンターホール



のついている作品のみ、撮影可能です。

No.	タイトル	制作年	寸法 (cm)	所蔵
1	空洞説－円い沼 <i>Void - Circular Pond</i>	2015	φ 376×145	作家蔵 collection of the artist
2	空洞説－沈む船 <i>Void - Sunken Ship</i>	2010	22×150×23	作家蔵 collection of the artist
3	空洞説(ドラム状の)－2013 <i>Void (Shaped like a Drum)-2013</i>	2013	φ 458×240	作家蔵 collection of the artist
4	空洞説－木の舟 <i>Void - Wooden Boat</i>	2009	113×85×1100	作家蔵 collection of the artist
5	泉 <i>Fountain</i>	1991	φ 95×1926	東京都現代美術館蔵 collection of Museum of Contemporary Art Tokyo
6	Trieb－水路 <i>Trieb - Waterway</i>	2010	220×200×700	作家蔵 collection of the artist
7	寓話V－鉛の柩 <i>Allegory V - Lead Coffin</i>	2016	100×345×100	作家蔵 collection of the artist
8	空洞説－円環⇄壺 <i>Void - Circle ⇄ Pot</i>	2012	φ 370×110	作家蔵 collection of the artist
9	無題 <i>Untitled</i>	2017	φ 880×300	作家蔵 collection of the artist
10	Trieb－ナルチスの独房Ⅱ <i>Trieb - Solitary Cell for Narcissus II</i>	2000	190×160×252.2	作家蔵 collection of the artist
11	Trieb－振動 2017 <i>Trieb - Vibration 2017</i>	2017	300×420×1750	作家蔵 collection of the artist
12	空洞説－薬療師の舟 <i>Void - Apothecary's Boat</i>	2017	108×790×100	作家蔵 collection of the artist

【聖性】

ひととおりにミニマル・アートとコンセプチュアル・アートの状況を通じた後、西欧的な美術の文脈と個的な〈生命〉の問題を統合すべく私が至った場所は、つまるところ、原初物質と原初形態から出現する〈聖性〉についての思考であった。[1989年]

【考古学】

始まりにおいては、物理的な物質としてあるいは〈もの〉として捉え、〈もの派〉的枠組みに準拠し制作を進めてきた。だが穴を掘るという経験は考古学的な位相をもたらし、さらには〈もの派〉的思考から外れる契機をもたらした。…この穴を掘るという経験は、考古学的位相への接近とモダニズムからの離反という、二つの方向が交差する大きな分岐点であった。[2014年]

【沼】 《空洞説—円い沼》

いもりの様な生き物を裡に懐いて平然と静まりかえる沼は、薄気味悪かった。沼の水はイメージを呑み込んだまま吐き出そうとしないところがあった。だが、それでも沼は、静止する水の意味を豊かに示してくれた。[1983年]

【舟】 《空洞説—沈む船》《空洞説—木の舟》《空洞説—薬療師の舟》

「舟」のイメージは長い間私を捉え続けてきた。…主観的な印象としては、受容と救済を唆す甘美な罨に思えた。また地上的な規範を無言のうちに擦り抜けて、いつも水面へと誘い、そこではあらゆる衝動が意味を回復していた。そして、航路の最果ては詰るところ、大地と天使たちの、いまだ未分化の場所に繋がっていた。[1988年]

【空洞】 《空洞説（ドラム状の）-2013》

無数の対立項は、両者の目眩く融合と、暗黒の自己消失への欲望を秘めて、差異を前提とする加速度的な循環運動そのものと化す。そしてその運動の中心部には、例えば台風の目に相当する、無為の〈空洞〉が立ち現れることになる。[1991年]

【泉】 《泉》

泉。水の器、器の底を抜く。その時生じた空洞は、空洞の湧出性と吸引性と循環性を永遠の運動へ導く、原システムのメタファーだ。そして、やがてそれは透明な無為、聖なる空洞性そのものとなる。[1991年]

【水路】 《Trieb—水路》

水が地形の高みから低地に向けて流れるように、或いは、熱が高位から低位に導かれるように、私たちの内にも必然的な流れが在る。例えば、運河を、人間が水の流れに与えたひとつのかたちであるとするなら、私たちの行為やしぐさも、己が内なる流れに与えたそれなりのかたちといえなくもない。かかる見方からすれば、表現行為といえども、私たちが、内なる流れに与える水路（通路）付け、その仕方、或いはかたちそのものに他ならない。[1980年]

【柩】 《寓話V—鉛の柩》

柩や墳墓は死者のためではなく、置き去りにされた者のためにある。共同体は、死者を柩と墳墓に隔離し死を秘匿する。だが、その遮断と秘匿において、死は現実から共同幻想の内へと移行する。そしてその瞬間に死者の優位は〈空洞〉の優位へと入れ替わる。共同体成員を、死と聖をめぐる無限運動に引き込むのはもはや死者ではなく、〈空洞〉の表象性のそれ自体なのである。[2013年]

【円環】 《空洞説—円環⇄壺》《無題》

私にとって円環は、そしてたぶん私以外の人々にとってもそれは、天の中心と地上の中心と地底の中心を垂直に貫いて結ぶ、特殊な形態なのだ。[1991年]

円環と垂直性。円環とその中心を貫く垂直なる〈外部〉。この構図を、私は聖性の表象として捉えてきた。[2006年]

【ナルチズム】 《Trieb—ナルチスの独房II》

…この国に発生する様々な出来事が、またその出来事に対応するための、われわれの行動とその方式が、何か不確かな、中心軸を欠いた印象を与えるのも、つまりはナルチズムの挫折が慢性的に浸透し、作用している故のような気がしてならない。ナルチズムの挫折。…この国がこうした事態に至ったのは当然、その元の事情がある。その直接の事情はまず、規範の自己構築と自己展開の力の欠如、そしてそれによる無力感の持続、そしてそれがもたらすリビドーの退行だ。[1997年]

【Trieb/振動】 《Trieb—振動2017》

〈欲動 Trieb (トリープ)〉というドイツ語は、フロイトが用いた述語である。この言葉は、本能 (instinct)、衝動 (impulse)、欲求 (need)、欲望 (desire)、そして動因 (drive) といった意味内容を包摂した概念語である。また、ネガティブには、欠落あるいは欠如 (absence) をも意味している。[1997年]

…実在するはずの水は、観るものの内で、実在と不在のあいだを激しく往還し、観念の振動状態へと誘い込む。それはもはや、言語的現象性における捏造と呼んでもさしつかえない状態なのであり、同時に事物の認識過程に内在する妖しさ、あるいは脳内の物質移動がもたらすエロス性を帯びた認識過程とも言い得る様態でもあるのだ。[2000年]

【水】

落下する水は、知的な解釈を超えて、身体に直に届く暴力的な力です。あるいは、表皮を破って直接神経に突き刺さる、限度を超えた過剰の表象です。[2013年]